

に腕組みをして、深く顔をうずめると、静かな声でぼつりと言った。

「ホント、こえー。お前に嫌われるの……こえー」

きゆうっと胸が甘く疼いて苦しくなつて、俺は目を見開いた。

嫌つたりなんか、しないのに。どうして丹羽くんは、俺なんかに嫌われることを、そんなに怖がつたりするんだらう。そんなこと、有り得ないのに。絶対、無いのに。

むしろ俺は、丹羽くんのこと……。

「てーかさ、順！」

いきなり大きな声を出され、俺はびくつと背筋を伸ばした。危ない。今、俺、何を考えてた？ 丹羽くんはがばつと体を起こすと、口をへの字にひん曲げて俺をキツと見つめた。

「なんで俺のこと、『丹羽くん』て『くん』付けなワケ？ 別に呼び捨てでいいんだけど」
「だって、それは……」

そんなに親しいわけじゃないし、と言いかけた言葉を口の中でもごもご留める。さすがに本人を前にして、それは失礼すぎるだろう。

だって、丹羽くんはみんなの人気者なのに。

俺みたいなのが馴れ馴れしく呼び捨てとか……あんまり図々しいじゃないか。

言い淀んで俯いた俺を前に、丹羽くんはほつぺたを赤くして、少し拗ねたように唇を尖らせた。

「クラスメートなんだし、順も俺のこと、名前でもいいよ。ほら、」

そんなことを言われても、名前でなんて呼べるわけない。俺は赤くなっていく顔を、ふいつと逸らして唇を引き結んだ。そんな俺の顔を覗き込むと丹羽くんは、あくまで楽しそうににこにこした。

「な、試しに一回だけ。呼んでみてよ。せーの、」

「太陽！」

高く可愛らしい声が教室に響き、俺と丹羽くんは揃って入口の方を見た。そこには、長い髪をなびかせて、一人の女子が立っていた。

「太陽、まだこんなトコにいたの？ 今日早く帰って来いって、おばさんが言ってたじゃない」

「うっさいなあ、俺はいいから美玖^{みく}だけ先行つてろよ」

丹羽くんがさも面倒くさそうに首の後ろをガリガリと掻く^か。俺はただただ目を丸くして、二人のやりとりをぼかんと見つめた。

斎藤^{さいとう}美玖。学級委員の一人だから、俺ですら名前を憶えている。

腰まで届くさらさらの長い髪と、つんと釣り^つ上がった大きな瞳が特徴的な、いわゆる「美少女^{たかめい}」の類ではあるのだけれど、勝ち気な性格が災^{わざわ}いして、男子からの人気はさほど高くない。

斎藤さんは短いスカートをひらめかせてずかずかとこちらにやってくる、描きかけの俺の

スケッチブックをちらりと見て、あからさまに嫌そうな顔をした。

「太陽、アンタ最近一体なんなの？　なんか急にオタクとつるむようになったりして。下敷きにオタクっぽい絵とか入れちゃってるし。キモいんだけど」

「お前みたいなのと違ってりかちゃんは天使なんだよ！」

「二次元に何言ってるの、あーオタクってマジキモーい」

キモい、と言われることには慣れている。女子から白い目で見られることも。けれど、だからと言って胸が——痛まないかと言えば、そういうわけでもない。

馬鹿だなあ、俺。どうして忘れていたんだろう。

これが、「普通の反応」なんだ。

アニメや漫画に夢中になって、現実の友達よりも二次元に比重を大きくして。そりゃ、気持ち悪いと思われて当たり前だ。至極当然のことなのに。

忘れていたんだ。丹羽くんが、あんまり嬉しそうにイラストの話をしてくれるから。あんまり優しくしてくれるから。だから俺は、自分がオタクなことも忘れて、……少し、調子に乗っていたんだ。

俺が俯いて唇を引き結ぶのと、丹羽くんが威勢よく机を叩いて立ち上がったのは、ほぼ同時のことだった。

「美玖、いい加減にしろよ！　俺はともかく、るりかのこと順のことも、悪く言うのはいく

らお前でも許さないからな」

丹羽くんがざろりと斎藤さんを睨み付ける。その迫力に気圧されて、斎藤さんは一瞬たじろいだ。

「……何よ。へんなの。とにかく、後でおばさんに叱られても知らないからね！」

捨て台詞を残して斎藤さんは、小走りに教室を後にした。静まり返った教室に、俺と丹羽くんだけが残される。

丹羽くんは大きくため息をつく、ずるずると沈み込むように再び椅子に腰を下ろした。

「……ごめんな、順。なんか……」

「えっ、いや、あの！ 丹羽くんが謝ることじゃないし！」

どうしよう、嬉しい。

俺なんかのために、どうして丹羽くんは怒ってくれたりしたんだろう。嬉しい。たとえるりかのためだとしても、俺のイラストを擁護してくれた、その事実は変わらない。たまらなく心強くて、どうしようもなく照れ臭い。

けれど、しおしおと眉を下げる丹羽くんを見て、俺は左胸がちくりと鈍く痛むのを感じた。斎藤さんの言葉に、腹を立てているわけじゃない。

気になるのは、もっと、別の……彼女の発言を、何故、丹羽くんが謝るのか——ということだ。

どうしてだろう。キツイ言葉に傷つくよりも、どうして丹羽くんと斎藤さんの距離に、こうも胸が痛むんだらう。

「……仲、いいんだね。斎藤さんと」

なんとなく目を逸らしてそう尋ねると、丹羽くんはふっと苦笑した。

「腐れ縁くさ縁なんだよ、幼馴染おきななじみ。幼稚園から小学校も中学校もずーっと一緒いっしょ！ ついでに高校まで一緒になっちゃった」

やれやれ、と演技がかった動作で肩を竦める丹羽くんは、また、俺の胸がちくんと痛んだ。

「あーったく、ホントなんでアイツみたいなのが幼馴染なんかなあー。どーせなら、るりかちゃんみたいな子が良かったなあー」

大きく伸びをしながら丹羽くんがぼやく。そうしてひょいと腕を伸ばすと、俺の描きかけのスケッチブックを手を取った。

「でも、いつか。るりかちゃんはいなくても、るりかちゃんを描いてくれる順はここにいるんだもんな！」

にこっと明るく笑い掛けられ、俺もへらりと笑い返した。

ずきん、と胸に何かが刺さる。

丹羽くんが興味あるのは、俺じゃない。俺じゃなくて、俺の描いたるりかのイラスト。絵を描く約束さえしていなければ、俺みたいな暗くて地味なオタクなんて、丹羽くんは声を掛けて

もらうことも無いだろう。丹羽くんが好きなのは「るりか」だから。それだけだから。

なんだろう、この気持ち。どうしてこんなに、胸が痛くなるんだろう。

丹羽くんが好きなのは、俺じゃなくて俺の描いたるりか。わかっているのに、そんなのとっくにわかっていたのに胸のちくちくが治まらなくて、俺は上手く笑えていたか、正直全く自信がなかった。

結局この日はなんだかうやむやになってしまつて、イラストはほとんど進まなかった。

俺と丹羽くんは、すっかり冷え込んだ夕暮れ空の下を二人並んで歩きながら、またも肉まんにかぶりついてた。

「なあ、順が次、部活無い日っていつ？俺は火曜なんだけど……」

「火曜なら俺も空いてるよ。じゃあ次回は、火曜にしようか」

俺が頷くと丹羽くんは、ほっと顔をほころばせた。

「なんか悪いな、何度も付き合わせちゃって」

「いいよ別に、イラスト一枚くらい。早ければ一日で描き終わるし」
「えっ」

絶句した丹羽くんの口元から、ぽろりと肉まんがひとかけら落ちた。ぴたりと足を止めた丹羽くんは、俺はきょとんとして振り返った。